

大阪商業大学学術情報リポジトリ

芭蕉の「夢」－「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」追考－

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2023-12-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石上, 敏, ISHIGAMI, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/2000427

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



芭蕉の「夢」

―「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」追考―

石上 敏

- 一、はじめに―「夢」と「夢心」
- 二、「はかなき夢」と「夏の月」
- 三、芭蕉句の「夢」と「心」
- 四、邯鄲の夢・胡蝶の夢
- 五、おわりに―旅の「夢」

一、はじめに―「夢」と「夢心」

本稿では、「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」という芭蕉の発句における「夢」とは何であったかを考察して行く^①。支考によれば、元禄七年十月八日の深更に芭蕉がこの句を示した際には別案があった（『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』^②）。「なをかけ廻る夢心」がそれである。「いづれをか（どちらをとるか）」と問うた芭蕉に対して、支考は「其五文字はいかに承り候半（最初の五文字はどのようなものでしょうか）」と問おうと思ったのだが、「いとむつきし御事（とても面倒なこと）」になるといけないと、消耗した芭蕉を氣遣ってその質問を控え、「此句なにかおとり候半（この句は一体何に劣るというのですか）」と問うたのだという。しかし、芭蕉からの返答は得られなかった。

支考は、「其五文字（初五）」が何であったか分からぬままになって残念だと記しているが、おそらくそれは「旅に病て」ではなかったかと

考えられる。⁽⁵⁾

旅に病てなをかけ廻る夢心

ただし、このことにも確証はない。支考の他に、この別案について記録した者がいないからである。しかし、支考からの聞き書きであると断わっている其角の『かれをばな枯尾華(芭蕉翁終焉記)』が「かれをばな枯野を廻る夢心」と記していることから、そのように考えられ、やはり支考からの伝聞と考えられる路通の『芭蕉翁行状記』が「夢は枯野をかけまはる」という表記で記すのを除いて、すなわち支考に発すると考えられる情報を除いて、「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」という発句を記録した事例は知られていない。⁽⁴⁾

この句は、上記の『かれをばな枯尾華』(元禄七年刊)が収め、支考の『笈日記』(元禄八年奥書)も言及したため、芭蕉が最後に詠んだ発句として繰り返し言及されることになる。しかし、右に述べたように、この句及び別案を示されたという支考の言及がなければ(上方吟行中の其角が芭蕉逝去の前日に駆け付けて支考に尋ねず、のちに支考が路通に語ることがなければ)記録に残らなかったであろう、そのような発句なのである。⁽⁵⁾ 最晩年の一か月余り、常に芭蕉の近くにおいて直接この発句を示されたという支考の記述に従って、「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」という発句の別案に「なをかけ廻る夢心」があり、しかし結局、現在私たちが知る形が選ばれたということを、ここでは改めて確認しておきたい。

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

以上のように、この発句の「夢」には当初「夢心」という別案があった。つまり、その時点までは、「夢」は「夢心」であつてもよかつたのだといえる。そして、いずれの句形も「夢」または「夢心」が「かけ廻る」という動作の主体であることは共通している。⁽⁶⁾ 「旅に病て」の主体(省略された主語)が「私」(芭蕉)であることは間違いないとしても、作意に従うのであれば「枯野」を「かけ廻る」のは「夢」であつて芭蕉ではない。あるいは芭蕉であると同時に「夢」であつた。いずれにせよ、「私」(芭蕉)は「旅に病て、夢は枯野をかけ廻る」と、一句の中に二つの主体(主語)をもつのが「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」という発句の文法的な構造である。

これに対して、「なをかけ廻る夢心」という句形では、「夢心」という主体(主語)と「(なを)かけ廻る」という動作(動詞)の一組が提

示されるのみであるが、初五(初句)が「旅に病て」であつた場合、「夢心」が「旅に病て」と「(なを) かけ廻る」という二つの動作の主体となる(主語となる)可能性は文法的に否定できない。そして、こう考えると「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」もまた実は同様の構造である可能性を否定できないことに気づかされる。「夢」という主体(主語)が、「(旅に) 病て」、「(枯野を) かけ廻る」という二つの述語の主体(主語)であるという可能性が、この句形であつてもあり得るのである。

もちろん、そのような可能性が決して高くはないであろうことを、私たちの常識は感じ取っている。「旅に病」んだ(病んでいる)のは芭蕉であり、「夢」は「枯野をかけ廻る」の主語にとどまるであろう、と。しかし、本稿ではそのような先入見をいったん捨てて、成心なくこの発句に向き合つて考えていきたい。「夢」は「枯野をかけ廻る」ものでありつつ、あるいは「旅に病」むものかもしれない。また、それは「夢心」と言い換えることもでき、その「夢心」は、ただ「かけ廻る」だけではなく「なを」かけ廻るものであると芭蕉は詠んだのである。

二、「はかなき夢」と「夏の月」

掲出句と同じように主体が明確ではない「夢」を、芭蕉は他にも詠んでいる。

蛸壺たこづぼやはかなき夢を夏の月

貞享五年(元禄元年、一六八八)四月、芭蕉は『笈の小文』の旅で明石・須磨を訪れた。「蛸壺やはかなき夢を夏の月」は、その折に明石で詠まれた発句である。「蛸壺や」とあるのだから、「はかなき夢」を見ているのは蛸壺に入つて捕われ、いずれ人間に食われてしまう蛸なのだという考え方があり、その一方に、須磨・明石をおとすれた芭蕉こそが「はかなき夢」を見るのだという考え方が⁽⁷⁾ある。その場合の「夢」とは、実際に眠つてから見るものであるとも、海辺の風景を眺めながら感ずる「夢心地」であるとも考えられる。さらに、この発句の背景を成している典故に基づき、これは光源氏が見た夢であるとも、在原行平や平家一門の夢とも考えられてきた。

そのうえで、『源氏物語』の登場人物である光源氏や、滅亡に向けて敗走する平家一門の「はかなき夢」に同化した芭蕉の夢という複合的

な「夢」であると考えられることもでき、蛸の哀れさに感情移入した芭蕉の「夢」という別の複合すら考えられる。また、蛸壺に入った蛸の姿が、ひとりで須磨で逼塞状態に置かれていた光源氏の姿と重ねられているという考え方も可能であろう。そして、蛸と源氏と芭蕉という三重の主体構造すら想定しうるのである。従来指摘されてきたのは、先に掲げた五または六案であるが、それ以外の複数の可能性も考えることができ、この発句には(あたかも蛸の足のように)多くの解があり得て、じつに捉えにくいものといえるだろう。

『笈の小文』では、「蛸壺や」のあとに次のような情景描写が続く、芭蕉は月の発句を詠んでいる。

卯月の中比、須磨の浦一見す。うしろの山は青ばにうるはしく、月はいまだにおぼろにて、はるの名残もあはれながら、ただ此浦のまことは秋をむねとするにや、心にももの、たらぬけしきにあれば

夏はあれど留守のやう也須磨の月

「蛸壺や」の句と隣り合う場所、ほぼ同じ時に詠まれた右の発句から、「蛸壺や」の句は、空の蛸壺(蛸の不在)に不在の月を懸けた可能性が考えられる。つまり、「蛸壺やはかなき」までで句意は一旦途切れて「はかない(空の)蛸壺」を示し、同時に「はかなき」は「夢」にも掛かって、「はかなき夢」が「月」によって具象化される。そして、ここからはなお、「はかなき夢」を見ているのは「夏の月」や「蛸壺」であるという解釈も可能なのである。『猿蓑』(元禄四年刊)に「明石夜泊」として載る周知の発句「蛸壺やはかなき夢を夏の月」であるが、このように従来の五、六案に加えて合計十案以上の解釈が可能な、実に解釈の難しい発句である。あるいは芭蕉は、そのようなつかみどころのなさ自体を、この一句に込めて詠んだのではなかったか。

そこで次に「夏の月」に注目すれば、すでに芭蕉には、以下の一句があった。

夏の月ごゆより出て赤坂や

延宝四年(一六七六)の夏から秋、江戸出府以来二度目の帰郷(六月下旬から七月二日までの短い滞在)からの帰路、芭蕉は養子の桃印を連れて江戸に戻る。前年(延宝三年)の宗因歓迎百韻に「桃青」を名乗ったばかりの頃であるから、十年ほど前に養子にした甥を門人格に仕

立てて「桃印」を名乗らせたものだろう。二年後の延宝六年に芭蕉は『桃青三百韻附両吟二百韻』を上梓し、翌年には続けて『桃青門弟独吟二十歌仙』を出版する。その「門弟」二十一名の中に桃印は含まれないが、吟桃の名が見える。また、桃隣もこの頃の名づけであったろうか。俳諧宗匠となった桃青は、門人たちに強いて「桃」の字を名乗らせることはなかったようだが、杉風・杉化、仙松・岡松と「杉」「松」の文字を持つ者が二名ずつ、そして嵐蘭・嵐亭(嵐雪)・嵐窓・嵐竹と「嵐」を名乗る者が四名と際立っている。延宝九年(九月に改元して天和元年)に門人李下から芭蕉の株を贈られて「芭蕉庵桃青」、翌年から「芭蕉」と名乗った桃青は、それ以後再び俳名として桃青を名乗ることはなかった。¹⁰⁾ 李下とは、もちろん中国の故事「李下に冠を正さず」(陸機「君子行」)に由来するだろうが、「桃」に遠慮して「李(すもも)」を名乗った俳名でもあろう。先に「嵐」の文字に触れたが、嵐は芭蕉(植物)の最大の敵であり、同時に風流の契機でもあった。芭蕉の株を贈られたのは延宝九年で間違いないが、それ以前から芭蕉が「嵐」に何らかの関心を抱いていたことが看取できる。¹¹⁾

寛文十一年(一六七二)春、二十九歳で江戸に下った芭蕉は、三年後の延宝二年春に最初の帰郷をする。¹²⁾ 下向の年に『俳諧時勢粧』や『山下水』に入集したのにもかかわらず、翌年(延宝元年)は句集への入集が見られない。将来を案じての帰郷であったかと思われる。そして、間もなく京都で季吟から俳論書『埋木』¹³⁾の伝授を受けている。

延宝三年(一六七五)には、先述の通り宗因歓迎の百韻に加わり、杉風・嵐蘭・螺舎(其角)といった、のちに蕉門の屋台骨を支える主要な門人たちが入門している。この頃から次第に句集への入集も増え、翌四年の春には、最初の門人にして終生の相談役であった素堂との『江戸両吟集』を公刊している。江戸出府以降の延宝三年頃に最初の出版物である『貝おほひ』を中野半兵衛方から出版して以来、芭蕉にとつては二作目の出版であった。「江戸両吟集」とは、いかにも大きく出たものだが、芭蕉にもそれなりの勝算と将来への展望があったに違いない。延宝四年の二度目の帰郷は、もちろんこの『江戸両吟集』を携えてのことだったはずで、実家に預けていた桃印を迎えに行くというのが最大の目的だったと思われる。すでに複数の門人が入門しつつあり、身の回りの世話を焼く者は江戸で雇うことができたはずだが、養子にした桃印のことが気になっていたのだろう。このあと水道普請に四年間携わることからも、俳諧宗匠だけの収入でやっていくのは難しかった時期であるが、パトロンと呼ぶべき後援者も揃いつつあった。

桃印は、元禄六年(一六九三)に三十三歳で亡くなるまで十七年間芭蕉と生活を共にする。芭蕉の書簡によれば、遡ること十年、桃印が「五六歳」の頃に引き取って養子にしている。実家に預けていた桃印を、田中善信氏が述べられたように、多少は生活が安定して迎えに行つたのだろう。「夏の月ごゆより出て赤坂や」は、その折に詠まれた発句であった。御油(東)を出て赤坂(西)に向かうというのであるから、実

際の月の運行を追ったものであるが、芭蕉もこの月と同じように江戸(東)から伊賀上野(西)に向かっていた。東海道の宿場の中で、最も距離の短い宿場同士であることで知られる御油と赤坂が選ばれたことについては、これまでさまざまに論じられてきた。¹⁴⁾ その際、短い宿場間であることと、短い夜に浮かぶ夏の月とを重ねて論じるのが常であった。宿場を出発したと思ふと、すぐ次の宿場に到着してしまう御油・赤坂間の距離(十六町、わずかに一・七km)と、出たかと思ふとすぐ夜が明けてしまう夏の月とを連想的に結びつけた意外性がこの発句の生命であり、芭蕉ならではの着想であろう。ちなみに東海道の総距離(日本橋から五条大橋まで)五一・四km中、宿場間の平均距離は約一〇kmあった。宮から桑名までの「海上七里」は例外として、小田原・箱根間が最長の四里八町(一六・六km)あり、御油・赤坂間の約十倍であった。「蛸壺」やはかなき夢を夏の月」に対して、夢を見る主体の候補として先に夏の月を挙げたのは、このように自ら旅する夏の月が芭蕉によって詠まれているからである。

明石で詠んだ「蛸壺や」にも、須磨での「夏はあれど」にも、月が詠われている。そこが須磨・明石と称される歌枕である以上、「月」が詠まれるのは『源氏物語』以来の約束事であったわけだが、それでもなお「蛸壺や」という発句を考える上では、「月」に、それも「夏の月」に注意を払う必要がある。この発句は、先に見たように「はかなき夢」を見る主体に多くの候補が考えられ、「はかなき夢」を見るのが「夏の月」であつてもかまわない。「蛸壺や」の「や」という詠嘆、または蛸に対する(蛸壺に対する)呼びかけがあつて、「はかなき夢を夏の月(が見る・見ている)」という解釈を排除できないのである。

成心なく読めばという前提においてであるが、芭蕉の句、特に発句は私たちの思いもよらない世界を表現している。アニメズムとも呼び得るような、その世界では人と動物のみならず、人と植物さらには人と物すらが会話を交わし、互いに姿を入れ替える。¹⁵⁾ 蛸が夢を見ることは、一般的に擬人化と呼ばれるような表現技法のレベルを超えて、芭蕉の世界では実際に蛸は夢を見るのである。それは芭蕉の時代においても荒唐無稽と呼ばれ、虚誕や迷妄と紙一重とされる世界であつたが、そのような創造の秘鍵に迫る可能性を、芭蕉の後進の幾人かは受け取って、自らの世界を成立させていった。中でも芭蕉を心から敬愛した蕪村は、そのような世界を生み出す才能に長けていた。¹⁶⁾ しかし多くの者にとつては到底不可能なことだったので、次第に敬遠され、ついには忌避されていったと考えられる。

このように、芭蕉の「夢」は「夏の月」と結びつく。まさに後世「真夏の夜の夢」と呼ばれる夢幻的な文学世界への接近が、十七世紀日本に現出していたのである。以上より、芭蕉における「夏の月」について理解したいと考え、「夏の月」ごゆより出て赤坂や」を検討した。自ら旅をする月である。初句に「夏の月」を置く芭蕉句は、この一句のみであるが、それに対して、結句が「夏の月」である発句は、以下の二句

が知られている。

清滝や浪に塵なき夏の月

これには、初句を「大井川」とする別案（支考『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』も存在するが、芭蕉自身が「大井川」と詠んだのか否かは別に考察したので、⁽¹⁸⁾本稿では繰り返さない。元禄七年夏に京都の落柿舎に滞在し、嵯峨の清滝川（大堰川）^(おおい)に舟遊びに出た際の発句である。本稿では、結句の「夏の月」が、「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」という発句を芭蕉が詠んだおそらく翌日（元禄七年十月九日）に「清滝や波にちり込青松葉」へと改訂されたことを確認しておきたい。⁽¹⁹⁾

このように、「夢」や「夏の月」が芭蕉にとつてどのようなものであったかを考察することで、最晩年の芭蕉の句境をいささかでも明らかにすることができるはずである。没後に何らかのメッセージを残すために詠まれる句を辞世句と呼ぶのだとすれば、それは芭蕉の場合、「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」である以上に「清滝や波にちり込青松葉」であったと考えられる。⁽²⁰⁾前稿は、そのことを述べるための前提を整理する目的で書かれた。本稿ではその結論のみ述べれば、芭蕉は「夏の月」を「青松葉」に、それも「波にちり込青松葉」に改訂することで、この発句に後世へのメッセージを託したのである。そうであれば、「青松葉」ではなく「夏の月」の側にある「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」は、この観点からも辞世句ではないという結論になる。

ところで、「夏の月」を含む芭蕉の発句は、もうひとつある。

手をうてば木魂に明る夏あきの月

これも芭蕉の落柿舎滞在中の詠句である。『類船集』などの付合語辞典にも載って広く知られる嵯峨と月との縁を踏まえたものだが、こちらには先の発句の三年前に当たる元禄四年夏の発句である。『嵯峨日記』（野村本）には、同句の別案として「夏の夜や木魂あきに明る下駄の音」が載り、こちらが初案であると考証されている。⁽²¹⁾そうであれば、芭蕉は、当初の「下駄の音」をのちに「手を打」った音に変更している。「木魂あきに明る（明ける）」というのは、八月二十三日の「月待ち」⁽²²⁾の夜の明け方（二十四日早朝）のことで、明け方の月に向かって柏手を打つ

姿を詠んだと解釈されている。⁽²³⁾ 山近く植物の気配に圍繞された嵯峨で、この時の芭蕉が樹木の生命(魂)を感じていたことを「木魂」という表記に籠めてもいるだろう。以下の発句に思い至る。

けし炭に薪まきわる音かをの、おく

これは「小野」に「斧」を掛けただけの発句ではなく、消し炭(燃え尽きて灰になった炭)を見て、それが樹木であった頃の故郷(洛北小野の奥山)を想像した発句であろう。そのような発句を詠む芭蕉であるから、初案の「下駄の音」を、下駄が樹木であった頃の「木魂」の音と重ねて聴くこともあっただろう。「木魂」はまた木霊であり、樹霊のことと考えられる。柏手を打つ音に呼応して反響する「研くだ(木霊)」を、おそらく芭蕉は、最初は下駄の音に聴いたのである。樹木が発する木霊の気配に覆われた嵯峨ならではの発句であった。そのような環境あるいは句境において、それが本当は何の音であったかを明らかにすることは、さほど重要なことではあるまい。重要なのは、そのような音を聴く環境があり、音を聴く芭蕉がいて、このような発句が詠まれたという事実である。

このように考えれば、その環境は限りなく「夢」の環境(空間)に近いことに気づく。短か夜の終わりに夜明けと混然一体となった「夏の月」は、そのような環境(空間)を象徴するひとつの目印であった。そもそも秋の季語(それも最も代表的な季語)である「月」を、わざわざ「夏の月」と呼んで異化をもたらしべき理由が、芭蕉にはあったのである。「清滝や浪に塵なき夏の月」から「清滝や波にちり込青松葉」への改訂は、そのような環境や空間を捨てて、「青松葉」の世界を選ぶというきわめて大きな変更であり、選択であった。⁽²⁴⁾

三、芭蕉句の「夢」と「心」

「旅に病て」の「夢」の検討に入る前に、もうひとつ考えておきたいことがある。それは、「夢心」という言葉に含まれた「心」についてである。芭蕉には、「心(こゝろ)」を含む発句が十七句ある。それらを、詠まれた年次(推定を含む)の順に概観しながら、特に本稿の趣旨に関わる発句について考察して行きたい。

先ずは初期（天和期以前）の発句であるが、次の二句（①②）が知られている。

- ① 七夕のあはぬこゝろや雨中天（寛文六年以前）
 ② 夏馬の遅行我を絵に看る心哉（天和三年）

先ず①は、雨中の七夕に彦星と織姫の心中を推し量る発句であり、②には「馬ほくく我を糸に見る夏野哉」「絵にみん」「夏馬ほくく」「茂り哉」など、さまざま別案があることで知られている。いずれも絵画的であり、画賛としての詠句とされている。

貞享年間（一六八四―八八）には、貞享五年（九月三十日に改元して元禄元年）を含めて以下の六句（③～⑧）がある。③は、芭蕉の「旅の人生」の劈頭を飾る『野ざらし紀行』の基調を詠み込んだ冒頭句であり、「野晒」を決意した「心」と、風に吹き晒される「身」を対照的かつ重層的に詠んでいる。

- ③ 野晒を心に風のしむ身かな（貞享元年八月）
 ④ 義朝の心に似たり秋の風（貞享元年秋）

次の④は、『野ざらし紀行』の旅で美濃の山中に至り、常盤御前の塚の前で詠んだ発句である。義朝は源頼朝の父である源義朝。その義朝の妾であった常盤は、のちに平清盛の妾となり、東国へ逃げようとしてここで盗賊に殺されたという（『平家物語』など）。依拠作として、『守武千句』の「月みてよときはの里にかかるらん／よしとも殿に似たる秋風」が指摘されている。すなわち、ここにも「月」が存在し、これを月の擬人化と見る説もある。もちろん秋の月ではあるが、前節で見た「夢」と「月」とのかかわりに「心」と「風（秋風）」が加わることになる。また、この句からは頼朝の従弟に当たる源義仲を詠んだ次の発句が想起される。

義仲の寢覚の山か月悲し

元禄二年(一六八九)八月十四日、『おくのほそ道』の旅も終盤に近づいたこの日、芭蕉は敦賀(現・敦賀市)にいた。そして、木曾義仲が都に攻め上る際の足掛かりとした燧が城のある燧山を仰いで、義仲が夜中に目覚めて見た月を思う発句である。⁽²⁹⁾むしろ、月が義仲を(そう)言つてよければ義仲の「心」を)照らし出しているものであり、同時にそれは月が芭蕉の心を照らしているのもあった。

- ⑤ 幾霜に心ばせをの松かざり (貞享三年春)
 ⑥ 先祝へ梅を心の冬籠り (貞享四年冬)
 ⑦ あこくその心もしらず梅の花 (貞享五年春)
 ⑧ あさよさを誰まつしまぞ片ごゝろ (貞享五年以前)

貞享三年の歳旦句である⑤は、「心ばせ」に「ばせを(芭蕉)」を掛け、三度目の春を迎える芭蕉庵を言祝いでいる。一方、来る春を祝うのが⑥であり、「梅を心に描きながら」という意味の「梅を心の」が、③の「野晒を心に」と同構造である。同じく梅を詠んだ発句が⑦であり、「人はいさ心も知らず故里は花ぞ昔の香にほひける」(『古今集』)と詠んだ「あこくそ」(紀貫之の幼名)の「心も知らず」をそのまま断ち入れて(詞取りをして)いる。⑧も⑤と同様、「誰待つ」に「松島」を掛けて、朝も夜も松島のことか気にかかって仕方ない様子があたかも片心(片思い)のようだと言う。

以下は、元禄二年以降の発句九句(⑨～⑰)であるが、⑨には、ここで問題としている「夢心」が詠み込まれている。先の⑧「片心」、のちに見る⑮の「花見心」、⑰の「よそ心」と並んで熟語を形成している「心」であるが、ここは明確に胡蝶の夢、『莊子』に載り、近世日本で大いに人口に膾炙した故事を踏まえている。掲出歌(別案)のほかに「夢心」という詞を用いた唯一の例なので注目され、⑨の「夢心」は、ここからは「夢心地」と言い換えることもできる。ただし、この句を記した怒誰宛書簡は偽簡の疑いが持たれている。同書簡以降に、該句は宝暦六年(一七五六)刊の旨原編『百歌仙』に初めて収められた。⁽³⁰⁾

- ⑨ 君やてふ我や莊子が夢心 (元禄三年春か)
 ⑩ 住つかぬ旅のこゝろや置火燧 (元禄三年十二月)

- ⑪ 魚鳥の心はしらず年わすれ (元禄四年十二月)
 ⑫ 此こゝろ推せよ花に五器一具 (元禄五年二月)
 ⑬ 中々に心おかしき臘月哉 (元禄五年十二月)

⑩は元禄四年(一六九一)一月五日、近江膳所の門人・曲水(曲翠)に送った礼状に見える発句であり、『粟津原』(宝永七年〇一七一〇年奥付)が上五を「落つかぬ」とするよう、落ち着かない旅先での「心」を置き炬燵に託したものであろう。むしろ、この落ち着かない状況こそが、かえって興趣を帯びて感じられるという旅中の感情を囑目的に詠んだものと考えられる。⑪は魚鳥の心を推し量るもので、椿の心を推量した⑬につながる。また、即座に「行く春や鳥啼き魚の目は泪」「行はるや鳥啼うをの目は泪」を思い起こさせる。花とのかかわりは⑫と⑬、また⑬は歳月に寄せる心で、⑬も「目の寄る所へ玉も寄る」という慣用句を援用して秋の気配に心を寄せ合う人々を描き出し、最晩年の「秋の夜を打崩したる咄かな」や「此道を行人なしに秋の暮」の別案「人声や此道かへる秋の暮」を思わせる。

- ⑭ 旅人のこゝろにも似よ権の花 (元禄六年夏)
 ⑮ 四つごきのそろはぬ花見心哉 (元禄七年春)
 ⑯ 秋ちかき心の寄や四疊半 (元禄七年夏)
 ⑰ 葉にそむく椿や花のよそ心 (年次不詳)

以上、寛文六年(一六六六)以前と非常に早い時期の①を含め、天和から貞享期の発句が八句、元禄期の句が九句(年次推定句を含む)の合計十七句である。ただし、②は結局「馬ぼくく我をゑに見る夏野哉」へと改訂されるので、十六句と数えることもできる。同じく⑭は「権の花の心にも似よ木曾の旅」という初案を改訂したものだ、いずれにも「心」は含まれている。②を先駆的な例として、野ざらしの旅に出発する際の③から、旅の象徴的な気分を詠んだ④を経て、「旅の心」を読む際に芭蕉が「心」という言葉を使い始めたことを受け取れることでもある。そして、貞享期を通じて「心」は詠まれ続ける。さらに元禄期に入っても(同二年の空白を置いて)、没年まで詠まれ続けるのである。

②を経て③④と、野ざらしの旅に生まれた「旅心」の表現は、元禄期に至っても⑩「旅のこゝろ」、⑭「旅人のこゝろ」と詠み続けられる。

いわば、「旅心」を意味する「心」の用例は、芭蕉が旅に生きる人生を送り始めて以来、生涯を通じて詠み続けられることがわかる。その意味で、③を皮切りに「旅の心」「旅人のこゝろ」を詠んだ⑩⑪は見逃せない。とりわけ「旅人のこゝろにも似よ」と呼び掛けて、「椎の花」で結ぶ⑭は象徴的である。この発句が元禄六年に詠まれていることは、翌七年の「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」を理解するうえでも見過ごすことができない。③については多くの論がある通り、芭蕉が旅に生きる覚悟を固めた境地を示す代表的な発句であるが、すでに②の時点で、旅ゆく自らの姿を「絵に看る」ようだと言観視して、この発句が旅の句のひとつの起点になったと考えられる。時を置いてその境地を思い返すたびに、少しずつ句形が変化して行ったということではなかったか。

また、⑨も見過ごしがたい。「旅に病て」の別案である「なほかけ廻る夢心」と同じ「夢心」という表記が用いられているからである。そして、それは莊子の胡蝶の夢を表わす言葉であった。以上のように、芭蕉における「心」は、「旅」と結びついて「旅心」を表わす場合が少なくないこと、「夢」と結びついて「夢心」の形で「胡蝶の夢」を暗示させる例が見受けられることの二点に、特に注目しておく必要があるだろう。

芭蕉は『笈の小文』では、先述のように「月はあれど留守のやう也須磨の夏」と詠んでいる。これは元禄元年(一六八八)、杜国とこくを伴って四月二十日(初夏)に訪れた須磨で、「蛸壺や」と相前後して詠まれた発句である。『笈の小文』には「月見ても物たらはずや須磨の夏」と並べて記されていて、別案なのか、それぞれ独立した発句なのか、かねてより議論の対象とされてきた。³³また、『芭蕉庵小文庫』や『泊船集』などでは、初句を「月を見ても」としている。これらが同一句の別案なのか、それとも単独句なのかということは今は措いても、ここに表現されているのは「留守」の月であり、「物たらはぬ月であつて、主意は「月の不在」である。それも、そこにあるのにもかかわらず留守のようであり、見えていても物足りなく思える月が詠まれている。芭蕉は、「秋もはやばらつく雨に月の形なま」のように、見えなくても見えるかのように秋の月を詠む人である。つまりここでは須磨の月は秋でなくてはだめだと突き放しているのであり、「夏の月」は無いにも等しいのだと詠んだのである。

同じ旅で詠んだとされる「蛸壺やはかなき夢を夏の月」においても、「はかなき」の対象であるのは「夢」であるとともに「月」であり、ここでも「はかなき(夏の)月」、つまり、あつてもなきがごとき空虚な月が詠まれたと考えられる。元禄元年四月二十日は西暦一六八八年五月十九日。月齢は十九の更待月である。十六夜の満月から四日過ぎているが、天気さえよければ、まだ十分に月の存在感はあつたはずである。なぜそれが「はかなき月」と呼ばれなければならなかったのか。

貞享元年（一六八四）に「野ざらし紀行」の旅で名古屋を訪れた芭蕉に入門した杜国は、その年の内に『冬の日』を編んだ⁽²⁴⁾。のちに七部集のひとつに数えられる重要な俳諧集成である。しかし翌年、杜国は空米売買の罪で死罪を言い渡され、一転、尾張藩主・徳川光友の恩赦によって三河国渥美郡に追放された。芭蕉が越人とともに杜国のもとを訪れたのは、それから二年後（同四年）の『笈の小文』の旅の途次であり、越人撰の『鶴尾冠』⁽²⁵⁾（享保二年刊）に、この折のことが記されている。

杜国が不幸を伊良古崎にたづねて、鷹のこゑを折ふし聞て

夢よりも現の鷹ぞ頼母しき

ここに、芭蕉の数少ない夢の句のひとつがある。すでに『笈の小文』には、この時の発句「鷹ひとつ見つけて嬉しいらご崎」が載るが、「夢よりも」の形を収めるのは『鶴尾冠』だけである。貞享四年（一六八七）の発句が、享保二年（一七一七）と三十年後の俳書に初出するのは、罪を問われた人に関わる句を取り上げることに対する躊躇があったものかと思われる。

該句は、「むばたまの闇のうつつは定かなる夢にいくらもまさらざりけり」（『古今集』恋三、よみびと知らず）を下敷きにしたものとされる⁽²⁶⁾。杜国に会うまでは夢にまで見た鷹だが、現にこうやって伊良湖崎の鷹を見ていると、現実だけに頼もしさがまさって見えるというのである。ここに詠まれた「夢」は、夜寝て見る夢であるとともに、杜国に会いたいという「願い（願望）」のこともある。

この折、杜国が三河にいたるということを知り、わざわざ後戻りして保美を訪れた芭蕉は、杜国が蟄居中であるのにもかかわらず、伊勢・伊賀上野から吉野・和歌の浦・奈良・大坂・須磨・明石・京までの旅をしている。その際に杜国が名乗ったのが万菊丸という戯号であった。そして、この折に須磨で詠まれたのが「月はあれど留守のやう也須磨の夏」であり、明石での「蛸壺やはかなき夢を夏の月」である。それから二年後（元禄四年三月）、杜国は三十代の若さで亡くなる。その一か月後に芭蕉は杜国を夢に見て、『嵯峨日記』四月二十八日の条に次のように記している⁽²⁷⁾。

夢に杜国が事をいひだして、涕泣して覚む。（中略）我夢は聖人君子の夢にあらず。終日妄想散乱の氣、夜陰の夢又しかり。誠に此も
のを夢見ること、謂所（所謂）念夢也。我に志深く伊陽旧里迄したひ来りて、夜は床を同じう起臥、行脚の勞をとみにたすけて、百日が

程かげのごとくともなふ。ある時はたはぶれ、ある時は悲しび、其志我心裏に染て、忘る、事なければなるべし。覚て又袂をしほる。

一四

嵯峨の落柿舎滞在中の芭蕉が、「前夜就寝するまで『笈の小文』草稿を整理し、杜国と同行した旅のことを思ったからこそ、そのような夢をみたのではあるまいか」という井本農一氏の指摘があるが、この頃から芭蕉にとつて、杜国と夢とは切り離せないものであったといえる。四月二十八日に見たこの夢のことを、芭蕉は五月一日に落柿舎を訪れた李由に語っており、よほど忘れがたい夢であったことがわかる。『周礼』の六夢に「念夢」は含まれないが、「寤夢」がこれに相当することは、『列子』周穆王篇の「六候」などからも明らかである。「寤夢」とは「醒めている時に言ったことをそのまま見る夢」のことである。漱石が、宋の大慧禪師にかこつけて「悟道の後、何事も意の如くに出来ん事はないが、只夢の中では俗念が出て困ると、長い間これを苦にされたそうだが、成程尤もだ」と『草枕』で「余」に言わせている「夢の中」の「俗念」に相当するだろう。

貞享五年(元禄元年、一六八八)四月、杜国とともに明石を訪れて「蜻壺やはかなき夢を夏の月」と詠んだ際、芭蕉は三年後に杜国の「はかなき夢」を見るなどとは思ひもよらなかつたであろう。しかし、その頃すでに杜国は不幸のさなかにあつた。芭蕉は、明石に続いて訪れた須磨でも「夏はあれど留守のやう也須磨の月」と月を、それも先述の通り現実には目の前にある月の不在を詠んでいる。須磨であれば月を詠むのは当然ではあるものの、実際に「ある」ものを「ない」と詠んだことを、杜国の訃報に触れた芭蕉はどのように思い返したのであるうか。

杜国といえは、『冬の日』に「杖をひく事僅に十歩」という前書とともに載る発句「つゝみかねて月とり落す露かな」を手土産に蕉門に現われた若き才人である。いわば、杜国は月とともに芭蕉の前に現われたのであり、芭蕉はこの発句にやられたのだと思う。掲載順からいえば、『冬の日』には「たそがれを横にながむる月ほそし」「月は遅かれ牡丹ぬす人」「つゝみかねて月とり落す露かな」「朝月夜双六うちの旅ねして」「我月出よ身はおぼるなる」と、発句・付句合わせて三十三句の内、杜国は月の句を五句詠んでいる。のみならず、「ねざめく」のさても七十「ねられぬ夢を責るむら雨」と寝覚めの句、不眠の夢の句までを詠んでいて、それらは芭蕉の印象に強く残つたものと思われる。

「ねられぬ夢を」の句は、芭蕉の「狩衣の下に鑑ふ春風」を踏まえた羽笠の「北のかたなくく簾おしやりて」を転じた付句であるから、そこには出陣した夫を思って寝られぬ妻の姿がかすかに揺曳している。そして、「ねられぬ夢」であるから『源氏物語』の須磨・明石にも通ずる。元禄四年三月に杜国を失つてからの芭蕉が、どれほど「夢」にこだわったか、改めて考察される必要があるだろう。

ただし、『春の日』(五句)には杜国の月の句は採られず、『あら野』(七句)も同様である。『ひさび』には杜国の句自体が載らず、『猿蓑』

では「亡人」として「似合しきけしの一重や須磨の里」の一句のみが「翁とよせに供られてすまあかしにわたりて」という題詞とともに収められている。杜国という門人のハイライトが芭蕉との須磨・明石行であったことは、蕉門でも周知されていたことであろう。その後の『炭俵』『続猿蓑』にも杜国の句は載らず、つまるところ杜国がその句風を鮮やかに示し得たのは『冬の日』のみであった。それだけに、月と寝覚めと夢は鮮明に杜国と結びついて蕉門に共有されたものではなかったか。

右の『嵯峨日記』の夢語り、特に「我に志深く伊陽旧里迄したひ来りて、夜は床を同じう起臥」「ある時はたはぶれ」「其志我心裏に染て、忘るゝ事なければ」などといったフレーズや、杜国が戯れに名乗った万菊丸という戯号、また支考の「杜国は故翁の愛弟なるに、不幸短命の嘆あり」（『本朝文鑑』）などといった一節などから、芭蕉との間に性愛的なつながりを云々されることもあったが、それは本稿の関心の外にある。鮮やかな才能を示して登場した若き門弟を芭蕉が愛し、その不幸な生涯を悲しんだこと、また、芭蕉が「夢」と記すとき、この門人の面影が脳裏に浮かんだのではないかということを確認できれば十分である。

四、邯鄲かんたんの夢・胡蝶こてつの夢

芭蕉の夢と詠嘆が結びついて詠まれた発句として、

夏草つはものや兵共が夢の跡

は、人口に膾炙する。「旅に病て」とともに、最もよく知られた芭蕉の夢の句と言ってよいだろう。この「夢」は、未来永劫の繁栄を夢見た奥州藤原一族、または義経主従の「願い」であり、去つてみれば儂い「夢想」のことである。「蛸壺や」と重なるのは、いずれも歴史上の故事を踏まえた発句であり、それも「兵（兵士）」の夢見た願望が踏まえられているということである。その意味で、「夏草や兵共が夢の跡」は、先に触れた「義朝の心に似たり秋の風」や「義仲の寢覚めの山か月悲し」などとも重なる。「義朝に」では、「夢（願望）」が破れて悲しみの内にある（あり続ける）義朝の心は、風となって常盤御前の墓前を吹き過ぎるのであり、「義仲の」は、「夢（願望）」破れた義仲が、夢から

目覚めて燧山を見たのであればどのように見えたであろうかと思いを巡らせた発句となっている。

深沢眞二氏は、「睡眠中に見る「夢」という現象を現わす場合に「願望」の意味が付随してくることはあっても、「夢」という語が「願望」の意味だけで使われることは、少なくとも芭蕉の時代にはまだなかった」とされる。⁽⁴⁵⁾ 邯鄲の夢を踏まえた『金々先生栄花夢』(安永四年、一七五五)では、「夢」は寝て見る夢であるとともに、明らかに願望(欲望)を意味している。⁽⁴⁶⁾ 夢が願望と結びついていなければ夢占は存在し得ないわけで、夢占の先蹤と呼ぶべき『周礼』がこれほど参照されるはずもない。芭蕉にも邯鄲の夢を詠んだ発句はあり、

富士の雪慮生が夢をつかせたり

が、それである。延宝五年(一六七七)以前の作とされ、すなわち極めて初期の発句であって、この期の芭蕉句の特徴である漢詩文からの典故を踏まえている。⁽⁴⁷⁾

この「富士の夢」は、「一富士二鷹三茄子」に掛けて立身や栄達、さらには先ほどの『金々先生栄花夢』のような栄華といった現世利益を夢見る、まさに願望としての夢を詠んだ発句であった。もちろんそれが初夢という睡眠時の夢と重ねて詠まれているのである。「富士の雪」ということで、謡曲『邯鄲』の「白金の山を築かせては黄金の日輪を出されたり」を踏まえていると解釈されてきたが、「富士の雪」が「慮生が夢」を「築かせ」というのは、邯鄲の夢がさらに俗化した「一炊の夢」にもとづいて、「米をつく(搗く)」を懸けたものであるろう。慮生が一炊の夢でたらふく食べた飯を、富士山に見立てたのである。近世日本の慮生は、何よりも腹一杯食べることが願望であった。雪をかぶった富士山を山盛りの米飯に見立てることは、「舍利」を米飯の隠語として用いた時代には普通に行なわれていたことであろう。

このことは、九〇六年までに成立したという『秘蔵記』に「天竺呼米粒為舍利。仏舍利亦似米粒。是故曰舍利」(現代語訳…インドでは米粒を舍利と呼ぶ。仏舍利が米粒に似ているからであり、そのため舍利と呼ぶのである)と載るといふ。⁽⁴⁸⁾ 正徳二年(一七二二)刊の『櫻陰腐談』や安永四年(一七七五)刊の『物類称呼』には、空海撰として『秘蔵記』が引用されているが、「銀舍利」という形での用例を近世より前に求めることができない。「仏舍利」という複合語はつとに流布していたので、舍利を米粒または米飯に見立てる意識と、米飯を白金(銀)の山に見立てる意識が重なれば、「銀舍利」という語彙の成立は可能であった。この言葉が第二次世界大戦後に「発生した」という説明を間々見かけるが、これは「流行した」の誤りである。⁽⁴⁹⁾

君や蝶我や莊子が夢心

すでにさまざまに指摘されているように、談林がよく用いたのが「胡蝶の夢」、すなわち『莊子』に描かれる莊周の夢である。近世の思想界のみならず一般にも老莊思想が流布したことは、近世文学研究においては中村幸彦・中野三敏両氏によって定説となった。⁽²⁰⁾「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」の別案という「なほかけ廻る夢心」に芭蕉が詠んだ熟語「夢心」の用例は、右の句との二例のみが知られている。

莊子の夢・莊周の夢といえば、近世の人々が広く知る、中国古典に現われる夢の故事(寓言)として、邯鄲の夢と並んで人口に膾炙した。それらの用例から、この「夢心」は「夢」そのものというよりも、「夢心地」の境地を指しているといえるだろう。あなたが蝶なのか、私が莊子自身なのかという「汝が我か、我が汝か」という意識の往還は、「君や蝶」という初句によって、やや趣が変わってくる。原典では、「蝶が私なのか、私が蝶なのか」と迷うのであり、「あなたが蝶なのか」という場面は存在しない。すなわち「あなたが蝶であるならば、わたしは莊子の『胡蝶の夢』のごとくにあなたに夢心地だ」という艶気を含んだ発句になるだろう。源氏名に蝶という文字が付く遊女は胡蝶・小蝶など少なくない。芭蕉に関係する範囲だけでも『続猿蓑』に「胡蝶」の題で載る重行の発句「風吹に舞の出来たる小蝶かな」は禿(見習い遊女)を蝶に見立て、『野ざらし紀行』に登場する茶店の女主人「てふ(蝶)」は、現役の遊女ではないが芭蕉に「蘭の香やてふの翅にたき物す」という発句を詠ませている。すなわち、そこには明らかに「願望」が介在している。

そもそも、この発句を記した怒誰宛書簡が真簡か偽簡かで未だに結論の出ない状況にあり、それによって当該句は芭蕉の真作か偽作かが変わって来る。あくまでも句形のみに対して感想を述べるのであれば、(1)「君」と「我」の位相が、右に述べたように「胡蝶の夢」本来のものとは異なっていること、(2)用字とりわけ「夢心」という語句の使用は、この他に「旅に病て」の別案のみ(それも支考だけが記録している)という事実、(3)元禄四年の吟にしては、談林風の典拠使用がいささかしっくりこない、(4)「君や」「我や」という対比の形をとった発句が他に存在しないなどの理由から、偽作の可能性は確かにあると考えられる。それでも、この発句は本稿で論じている芭蕉の夢という当面の課題を解くために参照する意味があると考えて、あえて掲出した。

五、おわりに―旅の「夢」

先に、念夢について述べるに当たり、漱石の『草枕』を引き合いに出したが、芭蕉の夢の発句にも、夢とともに草枕が登場する。

餅を夢に折結ぶしだの草枕

延宝九年(一六八一)の歳旦句である。「餅を夢に」とあるのは、せめて夢の中だけでも腹いっぱい餅が食べたいという願望であり、そのような贅沢な夢を見ながら歯朶(羊歯)の葉で編んだ枕を用いて寝ている(夢を見ている)という清貧との落差を、せつない笑いの内に詠んだ発句である。⁽⁵⁵⁾「餅を夢に折り結ぶ」というのであるから、これは起きていながらに見る夢、すなわち願望を主意とする。前年に移り住んだ深川を未だ仮寓の地と思う意識が「草枕」という言葉(現状認識)を選ばせたという田中善信氏の解釈は、はたしていかがか。今の自分には正月の餅さえ十分に食べられないという自己認識は、それでもなおこの境遇に立ち止まろうとする芭蕉の決意と表裏一体である。それは、前年冬に深川に移って貧寒たる草庵(生簀小屋、あるいは番小屋)に入り、この春(もうしばらくすると)李下から芭蕉の株を譲られ、風に破れる巨大な芭蕉葉を愛でて自らの終生の俳名とするような芭蕉の、やはり不退転の決意であった。

人生は旅であると芭蕉が言挙げするのは、さらに三年後のことになるが(『野ざらし紀行』)、芭蕉は草庵での暮らしを旅に見立てることはあっても、未だ中途半端な旅のようだとは考えていなかったはずである。⁽⁵⁶⁾「折り結ぶ」は、「餅を夢に折り結ぶ」と「折り結ぶ歯朶の草枕」の両方に掛かっており、この時芭蕉が折り結んでいるのは「夢」であると同時に「歯朶の草枕」であった。夢を見ることを「結ぶ」と表現するのは、『源氏物語』明石巻に載る「旅衣うらがなしさに明かしかね草の枕は夢もむすばず」に由来している。以来、草の枕では夢が結べないというのが「草枕」の相場であるにもかかわらず、芭蕉はシダの草枕で夢を結ぶというのである。

正月であるから、もちろん縁起の良い夢といえば「一富士二鷹三茄子」であり、芭蕉が見る餅の夢では、こんもり盛られた餅もまた富士山の見立てであるのだらう。とすると、シダは「志太」、すなわち富士山に近い駿河国の大井川河口一帯のことかもしれない。河口の三角州に由来する、しだる(したたる)ごとき立地ゆえに志太という地名がついたと考えられる場所である。⁽⁵⁷⁾のちに芭蕉が「奥の細道」に反映させる「鶯の細道」は、この地域(現・藤枝市)の名所であり、すでに芭蕉は何度もこの近くを通っている。

馬上落ンとして残夢残月茶の煙

馬上眠からんとして残夢残月茶の煙

馬に寝て残夢残月茶の煙

馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり

その大井川を西に越えたところ（現・^{みかたがは}三方原市）で詠まれたこの発句の「残夢」も、他に用いられたことのない唯一例であり、「残夢残月」と並べて、芭蕉は月とともに詠んでいる。何度も改訂がおこなわれ別案が複数存在する発句の代表例としても知られるが、馬・残夢・茶の煙は一貫している。また、改訂は右の掲出の順序でよいだろう。⁽⁹⁾

「残夢」とは、『野ざらし紀行』の題詞によれば「杜牧が早行の残夢」である。真蹟懷紙には、この部分が「杜牧が馬鞍の時をおもふ」とあって、いずれにしても杜牧の「早行」を下敷きとしていことがわかる。⁽¹⁰⁾ 五言律詩の起聯に「垂鞭信馬行（鞭を垂れ馬に信せて行く）数里未鶏鳴（数里未だ鶏鳴ならず）」、領聯に「林下帯残夢（林下残夢を帯び）葉飛時忽驚（葉飛びて時に忽ち驚く）」と見える。頸聯（後聯）には「月暁遠山横（月暁にして遠山横たわる）」とあって、先掲「義仲の寢覚の山か月悲し」を想起するのである。この時、杜牧は病気の弟を見舞おうと馬を進めているのだが、落魄の気分はすでにこの詩に満ちている。そして、この詩が重要なのは、芭蕉の「夢」が「月」と、さらに「旅」と強く結びつく根拠になっているからである。

このように芭蕉の「夢」は「旅」と結びつく。これは、「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」という発句の別案である「なをかけ廻る夢心」の初句が「旅に病て」ではないかと先に述べた根拠でもある。

次に、芭蕉の「夢」は夢そのものである以上に「残夢」（名残りの夢）であって、芭蕉は目覚めの夢を追いかけて、懐かしみ、悔やんでいる。⁽¹¹⁾ そして夢から覚めた時、そこには月がある。夜であるから当然ではあるが、月とは何よりも時の移り象徴する景物にほかならない。芭蕉にとって「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」（『おくのほそ道』）、すなわち時の流れこそが永遠の旅人であったことに照らせば、「旅」と「時」、「旅」と「月」とが結びついて詠まれることは自明の理であった。そして、それゆえにこそ等閑視できない。

それでは、そこに「夢」はどのように関わるのか。盧生の夢が描いているように、それは、ある意味で「時」を無化する契機となりうる。

胡蝶の夢が示唆するように、夢は生物・無生物すら問わず、自らと他者の垣根をはずし、無何有(『莊子』逍遙遊篇)の境地に遊ぶことを可能にする。「兵共が夢」は、時代・歴史を超えて、「今」を生きる芭蕉に語りかけてくる。そして、病の床に就いて見る「夢」は、最晩年の芭蕉にとって「旅」の象徴であった「枯野」を駆け廻るのである。⁽²⁾

注

(1) 私は先に、芭蕉がその最晩年(逝去の四日前)に詠んだとされる発句「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」(支考『芭蕉翁追善之日記』)について考察するに当たり、ここに詠まれた「夢」について触れた(拙稿「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」考―「枯野」は河内野ではなかったか『日本文学』第七〇巻第四号、二〇二一年)。この発句に詠まれた「旅」とは、どの旅を指すのか。「枯野」とは、どの枯野であるのか。そのように問いを設定し、「旅」とは芭蕉最後の旅、すなわち九月八日に故郷伊賀上野を出発し、九日に大坂に到着した短い旅であり、「枯野」とはその道中に目にした風景ではないかと指摘した。そのため、「旅」や「夢」や「枯野」は、いずれも抽象的なものではなく、具体的なひとつの旅であり、枯野であり、そして夢であると考え余地が生じる。そのように考えて、「旅」とは実際に芭蕉が大坂で病臥する原因となった伊賀上野から大坂までの直近の「旅」(芭蕉は曲翠に宛てた書簡でそのように述べている)であり、「枯野」とは、その旅で越えてきた枯野ではないかという一案を提示したのである。そのため、本稿の副題を「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」追考」とする。なお、芭蕉が旅を詠んだ発句に関しては、拙稿「くらがり越え」の旅―芭蕉はどのように旅に生きたか―(『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』第二四号、二〇二二年)で論じた。

(2) 『芭蕉翁追善之日記』及び『笈日記』の該当箇所は、赤羽学『芭蕉翁追善之日記(岡山大学研究叢書八)』(福武書店、一九七四年)に拠る。

(3) 引用は、このことを記した最も早い『芭蕉翁追善之日記』に拠る。以下同様。

(4) 『枯尾華(芭蕉翁終焉記)』『芭蕉翁行状記』の該当箇所は、注(2)の赤羽学『芭蕉翁追善之日記』に拠る。ただし、同じ支考に発するのであれば、「枯野を廻る夢心」は「なをかけ廻る夢心」とあまりにも差が大きすぎる。其角は「夢は枯野をかけ廻る」と混同して記憶していたのであろうか。なお、この発句が出版された句集に載ったのは芭蕉逝去十年後の『花蔭』を嚆矢とする。

(5) 『芭蕉翁追善之日記』によれば、支考は芭蕉逝去七日後の十月十九日に路通に会っている。拙稿「清滝や波にちり込青松葉」考(『解釈』七七一―七一九)一〇(七二二集)、二〇二二年)参照。

- (6) 「かけ廻る」のがあくまでも「夢」であることは、しばしば見過ごされてきた。別案は、その欠を明確に照射する。
- (7) 「夢」の主体が誰(何)であると解釈されてきたか、それぞれの当否について、露口香代子氏が「刊本『笈の小文』須磨の条における「蛸壺や」の句解について」(『樟蔭国文学』第二八号、一九九一年)で詳細な検討を加えている。
- (8) 尾形仍氏は「明石の海には、人麿の夢、光源氏の夢、明石入道の夢、平家一門の夢が眠っている」とし、「その同心円を描いて幾重にもひろがり深まる感動の波を、蛸壺が暗示する道化の夢の幻想と、「はかなき夢を夏の月」という曖昧に屈折した叙法とによって、みごとに表現し得ている」と論じた(『日本詩人選 松尾芭蕉』筑摩書房、一九七一年)。
- (9) 真蹟懐紙に拠る。『笈の小文』では「月はあれど留守のやう也須磨の夏(『笈の小文』の引用は、『芭蕉文集(日本古典文学大系)』岩波書店、一九六一年)。なお、蛸の見る夢を夏の月のイメージに転化したとする赤羽学氏の指摘がある(『芭蕉と人』明玄書房、一九九二年)。
- (10) ただし、逝去の約四か月前に当たる元禄七年六月八日付の猪兵衛宛書簡に「桃青」と署名するなど、この名を完全に捨て去ったわけではなかった。なぜ、李下に芭蕉を贈られたかという理由については、「芭蕉を移詞」にも書かれていない。なお後年、三千舎桃源に導かれて俳諧に携わった若き日の平賀源内が李山を名乗った事例が想起される。ちなみに李山の「山」は指月堂芳山からきている。
- (11) 延宝二年以前に芭蕉が詠んだ嵐の句は知られないが、貞享元年八月からの「野ざらし」の旅で詠んだ「三十日月なし千年の杉を抱あらし」(「葛植て竹四五本のあらし哉」が広く知られる。「野ざらしを心に風のしむ身哉」という感慨から始まる旅で、四十三句中、風が四例、木枯しが一例詠まれる中での「嵐」である。仲秋(八月)の「更科紀行」には十一句中「嵐」と「野分」が一例ずつ、「笈の小文」は冬から夏にかけての旅だけに五十三句中に「嵐」は詠まれないが「裸にはまだ衣更着の嵐哉」が見える。そのような関心のうえに、たとえば李下の屋敷に赴いた際に風に破れた芭蕉に興味をもち、それが李下にも伝わったことが芭蕉贈与のきっかけになったというような逸話が想像できるのである。
- (12) 以下、拙稿「清滝や波にちり込青松葉」再考―「難波の枯葉」との関わりについて―(『大阪商業大学論集』第二〇八号、二〇二三年)に述べた。
- (13) 以下、芭蕉の書簡は、主に田中善信編『全釈芭蕉書簡集』(新典社、二〇〇五年)に拠る。
- (14) 堀切 実・田中善信・佐藤勝明編『諸注評釈 新芭蕉俳句大成』(明治書院、二〇一四年)参照。
- (15) 拙稿「芭蕉の菊の句―「白菊」を詠んだ発句の解釈を中心に―」(『大阪商業大学論集』第二〇六号、二〇二二年)参照。
- (16) 拙稿「蕪村と河内」(『都大論究』第五三三号、二〇一六年)参照。蕪村よりあとの俳諧師や俳人になると、たとえば一茶にはそれは全く不可能であったし、子規はそのような世界を取り払って新たに俳句を打ち立てた。子規の世界では蛸が夢を見ることはなく、ましてや月が夢を見ることはありえ

ない。近代と呼ばれる合理主義の時代、夢を見る月は童話と呼ばれる児童文学や詩編の中に細々と生き残り、それらが息を吹き返すのは、おおかたにして現代の革新俳句を待たねばならなかった。たとえば蕪村の「河童かはちゆうの恋する宿や夏の月」などは近現代の童話・童謡に直結している。

(17) 其角が例外的に「夏の月蚊を疵にして五百両」という、いかにもこの人らしい諧謔の発句を詠んでいる。

(18) 注(5)の拙稿「清滝や波にちり込青松葉」考」参照。

(19) 正確には「十月九日」ではなく「十月七日から九日までの三日間のいつか」であったが、九日である可能性が最も高い。

(20) 注(1)の拙稿「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」考」参照。

(21) 注(14)の『新芭蕉俳句大成』(堀切実氏執筆「手をうてば木魂に明る夏月」)参照。

(22) 「月待ち」とは、旧暦九月十三日の十三夜をはじめ、十五夜、十七夜、十九夜など特定の月齢の夜に集まる講中行事で、月待ち講とも呼ばれた。一般には勢至菩薩を本尊とする二十三夜講が最も普及していた。

(23) 大谷篤蔵・中村俊定校注『芭蕉句集』(日本古典文学大系)(岩波書店、一九六二年)に拠る。

(24) 注(15)の拙稿「芭蕉の菊の句」参照。惟喬親王の出家隠棲(伊勢物語)を込めての詠ならば、「寂」の境地はいや増さる。芭蕉は他に「くれく、て餅を木魂のわびね哉」(天和三年発句牒)と、餅つきの音にも「木魂」を聴いている。

(25) 注(12)の拙稿「清滝や波にちり込青松葉」再考」参照。

(26) 松毳編『水の友』(享保九年(一七二四))が前書に「画賛」と記す。

(27) 『守武千句』の指摘は、注(23)の『芭蕉句集』に拠る。

(28) 雲英末雄・佐藤勝明訳注『芭蕉全句集』(角川ソフィア文庫)(角川書店、二〇一〇年)参照。月の擬人化は「御油から出て赤坂や」を彷彿させる。

(29) 義仲は、実際には越前の燧ヶ城(燧山)を、京都に攻め上る前に築いたのであり、近江(大津)の粟津で落命するのだが、このように脚色された。

(30) そのような事情もあり、この書簡は偽簡の可能性が指摘されて、存疑のまま現在に至る。偽簡であれば右の発句も非芭蕉句ということになる。

(31) 今栄蔵氏が述べられたように(『新潮古典文学集成 芭蕉句集』新潮社、一九八二年)、「堀炬燵ではなく置炬燵」を掲げて「一所不住の心境」を詠んだものであるうし、「本」である堀炬燵に対して「仮」の置炬燵を「本あっての仮」と見た安東次男氏の解釈(『芭蕉百五十首―俳言の読み方(文春文庫)』文藝春秋、一九八九年)に得心する。

(32) 貞享期までと元禄期の芭蕉の発句の句数は、ほぼ4・5の割合であるから、その割合に沿った句数といえる。

- (33) 注(23)の『芭蕉句集』が「別案」とするなど、別案併記の説が大勢を占める。なお、以下の月齢に関しては、ウェブサイトに「こよみのページ」の「月齢カレンダー」を参照。<http://koyoni.com/>
- (34) 松野鶴太郎『芭蕉と杜国』(私家版、一九八四年。久富哲雄監修『芭蕉研究論稿集成第一巻 芭蕉特輯雑誌集』クレス出版、一九九九年所収)など参照。
- (35) 芭蕉句が後年の俳書に初出する事例は珍しいことではない。とりわけ越人の場合には、芭蕉没後に俳壇を離れ、正徳五年(一七一五)に復帰するという特殊事情があった。
- (36) 注(14)の『新芭蕉俳句大成』(玉城司氏執筆「夢よりも現の鷹ぞ頼母しき」)に拠る。
- (37) 『嵯峨日記』は、中村俊定校注『芭蕉紀行文集付嵯峨日記』(岩波文庫) (岩波書店、一九七一年)に拠り、適宜改変した。
- (38) 井本農一「笈の小文」の執筆と元禄四年四月下旬の芭蕉」(『連歌俳諧研究』第三八号、一九七〇年)参照。
- (39) 千那・角上宛五月五日付李由書簡。西村燕々『千那』所収。注(38)の井本農一「笈の小文」の執筆と元禄四年四月下旬の芭蕉」参照。
- (40) 清水洋子「占夢の功罪を問うもの―「感変」からの一考察―」『中国研究集刊』(玉号(総五十号)二〇一〇年)、一五四―一七一頁。
- (41) 『草枕』は明治三十九年(一九〇六)『新小説』初出。『定本漱石全集 第三巻 草枕・二百十日・野分』(岩波書店、二〇一七年)に拠る。
- (42) 注(23)の『芭蕉句集』(日本古典文学大系)に拠る。
- (43) 注(1)の拙稿「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」考」に少しく触れた。
- (44) 白石悌三・上野洋三校注『新日本古典文学大系 芭蕉七部集』(岩波書店、一九九〇年)に拠る。『本朝文鑑』は『俳諧叢書』(古今堂、一八九二年)に拠る。
- (45) 深沢真二「枯野の夢夏草の夢(下)」『文学』二〇〇六年一月初出、『旅する俳諧師 芭蕉叢考二』清文堂、二〇一五年所収)。
- (46) ただし、『金々先生栄花夢』は十八世紀(近世中期)の黄表紙であり、十七世紀の芭蕉の時代からは一世紀後れての出典である。しかし、以下に見るように初夢はすでに「願望」の象徴であり、「願望」の換喩でもあった。
- (47) 漢詩文調に関しては、注(15)の拙稿「芭蕉の菊の句」で考察した。
- (48) 注(14)の『新芭蕉俳句大成』(清登典子氏執筆「富士の山盧生が夢をつかせたり」)参照。
- (49) ここでは、盧生が見る「一炊の夢」もまた、彼が旅に出た先で見る夢であったことを確認しておきたい。

- (50) 米田弘仁「秘蔵記」の成立年代」(『印度學佛教學研究』第四二卷第二号、一九九四年) 参照。
- (51) 近世期には、この例のように例えば中国の史書を身近な話題に転じて語ることが実には多かつた。むしろそのような翻案が江戸文芸、とりわけ戯作の根幹をなしていた。
- (52) 中村幸彦『近世文芸思潮攷』(岩波書店、一九七五年)、中野三敏『戯作研究』(中央公論社、一九八一年) など参照。
- (53) そうであれば、『芭蕉全句下』(筑摩書房、一九七五年) で加藤楸邨が指摘したように「莊子が」と読むべきであり、本稿もそのように表記した。
- (54) 怒誰が『莊子』の講義をしていることが元禄四年二月二十日付の芭蕉書簡に見え、阿部喜三男氏によって「それを裏書するやうな元禄四年二月二十二日附支幽・虜水宛(書簡)もある」と指摘され、同年四月十日付怒誰宛書簡にも「莊子のことが言及されてゐる」という指摘がなされている(『怒誰宛芭蕉書簡一通』『連歌俳諧研究』第一四号、一九五七年)。
- (55) 寝て見る「夢」と願望の「夢」に関しては、心理学の面からさまざまな考察が加えられている。注(45)の深沢氏「枯野の夢夏草の夢」など参照。
- (56) 注(13)の田中善信『全釈芭蕉書簡集(新典社注釈叢書一〇)』、同『芭蕉「かるみ」の境地へ(中公新書)』(中央公論新社、二〇一〇年) など参照。
- (57) 注(1)の拙稿「くらがり越え」の旅―芭蕉はどのように旅に生きたか―参照。
- (58) 磯部武男「万葉集「志太の浦」考」(『藤枝市史研究』第三号、二〇〇二年)。蕉門では野坡やばの姓が志太であったが、彼は越前の出身である。
- (59) 注(14)の『新芭蕉俳句大成』(玉城司氏執筆「馬に寐て残夢月遠し茶のけぶり」) 参照。
- (60) 真蹟懷紙は『芭蕉・蕪村展』(逸翁美術館、一九七四年) を参照。
- (61) 注(15)の拙稿で、芭蕉が「菊」を読むとき「残菊」を詠むことが多いことを述べた。「菊」よりも「残菊」を尊重する姿勢は「残月」への姿勢に重なるであろう。なべて「残」に対する芭蕉の意識(その変遷)が探られてよい。
- (62) 本稿では、「病む」「かけ」廻る」の考察にまで至らなかった。すべからず続稿を期したい。

【付記】 本稿は、大阪商業大学第三四回商経学会における研究発表「最晩年の芭蕉の動向―「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」を中心に、通説を疑う―」(二〇二二年一月一〇日)の一部分を拡充し、成稿したものである。同発表に対してご意見を賜った先生方、とりわけ、筆者の芭蕉研究に貴重な示唆を与えられた長妻三佐雄教授に御礼申し上げます。